Tohoku University

『華夷訳語』と『元朝秘史』におけるモンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表す漢字について

On the Chinese Characters Denoting Mongolian Verbal Endings =ba/=be, =bi, =bai/=bei in *Hua-yi Yi-yü* and *the Secret History of the Mongols*

栗林　均（Hitoshi KURIBAYASHI）*

キーワード：華夷訳語、元朝秘史、モンゴル語、動詞過去形語尾、漢字の書き分け

目　　次

1．はじめに
2．問題の所在
3．『華夷訳語』における状況
4．『元朝秘史』全体における状況
5．『元朝秘史』第1・2巻における状況
6．『元朝秘史』第3巻以降における状況
7．まとめ
付録資料1．『元朝秘史』における動詞過去形語尾を表す漢字の諸本の対校
付録資料2．『元朝秘史』で女性語の語幹に付いている「罷」と「罷原作別」

1．はじめに

いわゆる甲種本『華夷訳語』[1]（以下『訳語』と略す）と『元朝秘史』（以下『秘史』と略す）は、ともに14世紀の後半に漢字でモンゴル語を表記した文献であり、当時のモンゴル語と漢語の状態を知る上で極めて貴重な資料となっている。漢字の音をもってモンゴル語を表記したその方式は、当時の漢語に存在しない音を表すために一部の漢字を補助記号として使用したり、音節末の子音を表すために一回り小さい漢字を用いるなど、極めて緻密でしかも体系的である。さらに、モンゴル語の単語を語幹と語尾に分け、それらのひとつひとつに意味を付す分析の精確さは現代の言語学的な見地から見ても驚嘆に値すると言える。『訳語』と『秘史』において、モンゴル語の音や単語を表記する漢字の使用方法は、同じ単語や語尾に対して同じ漢字を用いるという傾向が見られ、音訳はそれぞれの文献の中で全体を見渡して考案された一定の方式に則って行われたと考えられる。

＊東北大学東北アジア研究センター

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

『訳語』と『秘史』におけるモンゴル語の音訳方式を比較してみると、全体として非常に類似しており、それらの製作が互いに関連をもっていたことは疑い無いが、詳細に見た場合には、両者の音訳方式に少なからぬ相違点が見い出されることもまた事実である。さらに『訳語』と『秘史』のそれぞれの内部をみても、それらを構成する巻によって、あるいは部分によって、同じ単語や語尾が異なった漢字で表記されている場合がある。それぞれの内部で表記が一貫している場合、そのような漢字の使用方法の違いは、複数の異なった音訳方式が存在していたことを窺わせる。それらは、文献製作の過程で方針を変更したことによるものか、あるいは別の方式で音訳された部分を継ぎ合わせたことによるものか、いくつかの可能性が考えられるが、いずれにしても音訳方式の違いは文献の製作時あるいは製作者の違いを反映するものと見なすことができる。音訳方式が複雑に重なり合っていることから、それらは個人の手で一朝一夕に成ったものでは決してなく、何回も音訳方式に改良が重ねられ、書き直された上で現在に伝わる諸本の原形が成ったものと推定される。

本稿は、『訳語』と『秘史』においてモンゴル語を表す漢字の使用方法に関わるひとつの問題を検討しながら、これらの文献の成立の過程に光を当てることを目的としている。

2．問題の所在

陳（1934：3a-3b）は、つとに『訳語』の方式がモンゴル語の発音だけを表した単純な音訳であるのに対し、『秘史』の方式は音だけでなく意味をも加味した漢字を選んでいる点に特徴があると指摘している。たとえば、漢語の「騮馬（去勢馬）」に対するモンゴル語の漢字音訳は『訳語』では「阿黒塔」と表記しているのに対して、『秘史』では「阿黒騮」と馬偏の漢字を使っている。漢語の「望着（見て）」に対する音訳は『訳語』では「中合舌剌周」であるのに対して、『秘史』では「中合舌瞰周」と目偏の漢字を使っている。漢語の「説（言う）」に対する音訳は『訳語』では「兀古列舌侖」であるのに対して、『秘史』では「鳴詁列舌論」と口偏の「鳴」、言偏の「詁」「論」を使っている、等々。

陳（1934：16a-25b）には、『秘史』における「モンゴル語の意味を考慮した漢字音訳方式」の実例が詳細に分類・列挙されている。その一部は次のようなものである：

「山」を表す「阿屻剌」（２番目の漢字の偏に山。『訳語』では「阿兀剌」）

「土」を表す「失舌羅埃」（最後の漢字の偏に土。『訳語』では「石舌剌兀」）

「河」を表す「沐舌漣」（２つの漢字にさんずい。『訳語』では「木舌連」）

「湖」を表す「納浯児」（２番目の漢字にさんずい。『訳語』では「納兀児」）

「冰（氷）」を表す「沫勒孫」（最初の漢字にさんずい。『訳語』では「莫勒孫」）

「喫（食べる）」を表す「亦咥忽」（２番目の漢字の偏に口。『訳語』では「亦迭」）

「目」を表す「你覩」「你睹」（２番目の漢字の旁に見、偏に目。『訳語』では「你敦」）

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

「見」を表す「兀瞻」（２番目の漢字の偏に目。『訳語』では「兀者」「兀穆」）

「行」を表す「迂歩」（１番目の漢字にしんにょう。２番目の漢字が「あるく」。『訳語』では「牙不」）

「走」を表す「癸趨」（２番目の漢字にそうにょう。『訳語』では「癸亦」）

「門」を表す「額閃閘」（２番目と３番目の漢字に門がまえ。『訳語』では「額兀顛」）

「衣」を表す「経額勒」（最初の漢字の偏に糸。『訳語』では「迭丁延」）

「鎗（やり）」を表す「鑌荅」（最初の漢字の偏に金。『訳語』では「只荅」）

「射（いる）」を表す「中合児鏷」「中合児髀」（最後の漢字の偏に金、骨。『訳語』では「中合児卜」）

「鷹」を表す「失鴾温」（２番目の漢字の旁に鳥。『訳語』では「鷹毎」に「失保兀楊」）

「鵝」を表す「中合鵝温」（２番目の漢字の旁に鳥。『訳語』では「中合老温」）

「鼠」を表す「中忽鱸中合納」（２番目の漢字の偏に鼠。『訳語』では「忽魯中合納」）

「貂」を表す「不鱸中罕」（２番目の漢字の偏に鼠。『訳語』では「不魯中罕」）

「馬」を表す「秣舌驎」（最初の漢字は「まぐさ」の意。最後の漢字の偏に馬。『訳語』では「抹舌鄰」）

「牝馬」を表す「格騷」（２番目の漢字の偏に馬。『訳語』では「格温」）

「駱駝」を表す「驖篾延」（最初の漢字の偏に馬。『訳語』では「帖篾延」）

モンゴル語を漢字で表記（音訳）する際に、その「音」だけでなく「意味」に関連した漢字を選ぶやり方は、『訳語』に全く見られないわけではないが[2)]、『秘史』においては上に見るように広い範囲にわたって徹底しており、『秘史』における漢字使用の大きな特徴となっている。

このような細心で徹底した音訳方式の中で、陳氏が特に注目したのは漢語の訳語「了」に対応して『訳語』と『秘史』で様々な漢字が使用されているという事実であった。漢語の「了」は「～した」と動作・状態の完了を意味するが、これに対応するモンゴル語の音訳漢字は『訳語』では「八」「巴」「別」「伯」、『秘史』では「罷」「畢」のほか「罷原作別」「罷原作伯」といった表記が用いられている。これらのうち、「罷原作別」と「罷原作伯」いう表記は、元来「別」「伯」と書かれていたものを、「罷」に書き換えたということを割注で表している。たとえば、「来了」（来た）という漢語訳のついたモンゴル語は「亦舌列罷原作別」と書かれている場合があるが、これは「罷」の字が元々「別」であったことを割注で示している。同様に「做了」（成った）という漢語訳のついたモンゴル語は「孛魯罷原作伯」と書かれている場合があり、それは元々「孛魯伯」と書かれていたもので、注記は「伯」の字を「罷」に書き換えたことを示している。陳（1934：3b）は、この場合の「罷」（「やむ、おわる」の意）の字は意味を勘案した漢字使用例の最たるものであるとした上で、一体誰がこのように書き換え、誰が割注を施したものであろうか、と疑問を呈している。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

陳（1934：10b-16a）は『訳語』と『秘史』における漢語の訳語「了」に対応する「八」「巴」「罷」「別」「畢」「伯」等の使用の実態を精査し、その後の研究が依って立つべき基礎を置いた。その考察は、陳（1934）の「八 華夷譯語了字音譯表」「九 元秘史了字譯罷表」「十 元秘史了字譯畢表」「十二 元秘史了字原譯残留未改表」等の章において示されている。それらの表題が端的に示しているように、漢語の訳語「了」に対応する「八」「巴」「罷」「別」「畢」「伯」等の漢字の使い分けの実態に関するものであった。

実際のところ、漢語の「了」は、上掲の動詞過去形語尾だけでなく、それ以外にもいくつかのモンゴル語の動詞語尾の訳語として用いられている。たとえば、漢語の「来了（来た）」に対応するモンゴル語の動詞「亦𠺕列(irc=)」の活用形としては、『訳語』では「亦𠺕列別(irc=bc 3:21a2, 来了)」の他に、

亦𠺕列克<客>先（irc=k<kc>scn 3:08b5，来了）【「客」は衍字】

がある。また、『秘史』では「亦𠺕列罷（01:17:07，来了）」「亦𠺕列罷原作別 03:31:02，来了」「亦𠺕列罷原作伯 03:34:03，来了」の他に

亦𠺕列主為(irc=jü'üi 01:34:08，来了)

亦𠺕列主兀(irc=jü'ü 04:03:04，来了)

亦𠺕列埃（irc=ci 01:48:01，来了）

亦𠺕列列額(irc=lc'c 02:30:07，来了)

亦𠺕列額揭(irc=ct 04:34:02，来了)

等々の形が見られる[3]。陳（1934）の考察は漢語の訳語「了」のついたもののすべてを対象にしたものではなく、「八」「巴」「罷」「別」「畢」「伯」以外の音訳形（上の例では「克先」「主為」「主兀」「埃」「列額」「額揭」）は周到に除外されている。要するに、陳氏が考察の対象にした「了」の字と対応する音訳漢字というのは、動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表す漢字を指しており、本稿が考察の対象とする「モンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表す漢字」に他ならない。

陳（1934）に示されている資料と見解は今日でもそのまま通用するものが多いが、その後の研究の成果に即して補足と訂正を必要とする箇所も見られる。その第１は、漢字訳語「了」をもたない「八」「巴」「罷」「別」「畢」「伯」等の漢字を考察の対象に含めることである。『訳語』にも『秘史』にも、モンゴル語を漢字で表記した本文（「音訳」）の単語や語尾の右側に漢語の逐語訳が付されている（「傍訳」）。漢語の傍訳は、極めて丁寧に施されているものの、それは完璧を期し得る類のものではなく、『訳語』においても『秘史』においても、「八」「巴」「罷」「別」「畢」「伯」等の漢字で表記されているモンゴル語の動詞過去形の語尾で、漢語の訳語「了」を伴わないものは、少なからず存在する。そうした事例は、陳垣氏の考察から洩れてしまっているが、これらを考察の対象に含めて資料を補足する必要がある。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

第2は、モンゴル語における動詞過去形語尾の体系に関する視点である。陳氏は、『訳語』と『秘史』において「八」「巴」「罷」「別」「畢」「伯」等の漢字を書き分ける理由について明確な見解を有するに至らなかったが[4]、それらが次のようなモンゴル語の動詞過去語尾の体系と関連していることは疑いない。

表1. 中期モンゴル語の動詞過去形の語尾体系

母音調和による交替形 ＼ 主語の数と性		男性形	女性形
単　数	女　性	=bi	
	男　性	=ba	=be
複　数		=bai	=bei

こうした動詞活用語尾の種類と使い分けは、小澤（1961）によって提示されたもので、こうした研究の成果を取り入れて、これらの語尾を表記する漢字の使い分けについて改めて考察することが必要である[5]。しかし、あらかじめ断っておけば、「八」「巴」「罷」「別」「畢」「伯」等の漢字の使い分けは上に掲げた動詞過去形語尾の図式と一対一で完全に対応しているわけではない。漢字の使い分けが、動詞過去語尾の図式と、どの点で合致し、どの点で合致しないのか、事実を整理して『秘史』における実態を明らかにした上で、動詞過去形語尾の図式自体を検証することも必要である。

陳氏の考察を補う視点の第3は、『秘史』の「モンゴル文字による異本」とも呼ぶべき『アルタン・トブチ（Altan tobči)』のテキストを参照することである。漢字に音訳された『秘史』の本文が、元来モンゴル文字で書かれていたことは疑いないが、『アルタン・トブチ』のテキストは、モンゴル文字で書かれていた『秘史』の一写本を参照しながら、その多くの部分を敷き写して成っている。そこには、『秘史』の本文全体の約3分の2に対応するモンゴル語テキストが収録されており、漢字音訳本とは異なる独自の情報が含まれている。1926年にモンゴル人民共和国典籍委員会委員長のジャミヤン公によって発見され、1937年にウランバートルでモンゴル文字の活字本として出版されたこのテキスト[6]は、1990 年に同地で原写本の縮刷影印本が公刊され、信頼できるテキストが利用できるようになった。こうして、『アルタン・トブチ』のモンゴル語テキストを『秘史』の異本のひとつとして位置づけることによって、モンゴル語の動詞過去形語尾に関してもこのテキスト独自の情報を参照することができる。

本稿では、陳垣氏が考察したこの問題を取り上げ、上述の視点から改めて事実を整理した上で、これに対する筆者の見解を提示する。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

3.『華夷訳語』における状況

『訳語』は三部より構成されている。第1部（28丁）は漢語とモンゴル語との対訳語彙集で、第2部と第3部は文例集である。第2部（28丁）には5件の詔勅が、第3部（24丁）には7件の書状が収められている。

『訳語』全体では、モンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bai/=bei を表すのに「八」、「巴」、「別」、「伯」という4種類の漢字が合計38回用いられている[7]。それぞれの漢字の各部における出現回数と合計は、**表．2**のとおりである。

表2．『華夷訳語』における動詞過去形語尾の音訳漢字の種類と出現回数

	第1部	第2部	第3部	計
八	10	2	6	18
巴	0	3	0	3
別	2	1	7	10
伯	2	4	1	7

陳（1934：10b-12a）は「八 華夷譯語了字音譯表」において「八」「巴」「別」「伯」を合計24例示しているが、それらの漢字で表記されている動詞過去形語尾はそれ以外にも14例ある。これらを含めて、すべての例を**表3．**に掲げる。表では、出現位置と漢字音訳形を示し、括弧の中にローマ字転写形と漢語の傍訳を示す[8]。

表3．『華夷訳語』における動詞過去形語尾の漢字表記一覧

（※印は、陳垣氏の「華夷譯語了字音譯表」に無いもの）

八（18例）

1:13a8　察惕八(čat=ba, 飽) ※

1:17a3　勺羅罕都八(joloqaldu=ba, 相遇) ※

1:17a4　薛舌列八(scre=be, 覺了)

1:17a5　篾迭八(mede=be, 知了)

1:17a5　塌你八(tani=ba, 認) ※

1:18a2　莎黒塔八(soqta=ba, 醉) ※

1:18b6　巴牙思八(bayas=ba, 喜) ※

1:18b7　中豁魯八 (qolu=ba, 嫌) ※

1:18b7　孩抹思八(haimos=ba, 嗔) ※

1:27b7　巴舌剌八(bara=ba, 了)

2:12a4　斡克八(ök=be, 與了)

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

2:15a3　孛魯中合八(bol<u>qa=ba, 做了)[9)]

3:09a1　討厂温八(tawul=ba, 分付了)

3:20b5　歹亦只八(dayyiji=ba, 反了)

3:21a2　阿剌八(ala=ba, 殺了)

3:21a5　孛魯八(bol<u>=ba, 做了)

3:23a4　歹亦只八(dayyiji=ba, 反了)※

3:23b3　中合舌里八(qari=ba, 囲了)

巴（3例）

2:20b2　孛魯巴(bol<u>=ba, 了也)

2:28a1　撒厂温中合巴(sa'ulqa=ba, 教住了)

2:28a5　札舌魯巴(ǰaru=ba, 差了也)

別（10例）

1:13a8　斡列思別(ölcs=bc, 飢) ※

1:18a7　薛舌里別(scri=bc, 睡覺) ※

2:27b2　那克赤也別(nökčiyc=bc, 教過去)※

3:10a1　亦列別(ilē=bc, 教去了)

3:21a2　亦舌列別(irc=bc, 来了)

3:22b1　恢亦扯別(küyyiče=bc, 趕上了)

3:22b4　古児別(gür=bc, 到了)

3:23a2　亦列別(ilē=bc, 教去)

3:23b4　兀古厂温別(ügü'ül=bc, 死教了)

3:23b5　斡克別(ök=bc, 與了)

伯（7例）

1:03b2　可児伯(kör=bci, 凍) ※

1:17b1　古児伯(gür=bci, 到) ※

2:03b4　阿伯(a=bai, 住) ※

2:04b3　不撒泥黒荅伯(busaniqda=bai, 潰散了)

2:25b3　只児中合伯(ǰirqa=bai, 快活了)

2:27a3　阿木児里厂温伯(amurli'ul=bai, 安撫了)

3:04b4　必赤伯(bičі=bci, 寫了)

陳氏の「華夷譯語了字音譯表」に無いもの（上の表で※印をつけたもの）のほとんどは漢語訳の「了」が付されていないものであるが、陳氏の表では「了」の訳語の付されていない「3:23a2

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

亦列別(ilē=be, 教去)」が含まれており、「了」の訳語が付されている「3:23a4 歹亦只八(dayyiji=ba, 反了)」が見落とされている。

一方、母音調和による漢字の使い分けの観点から、これらの漢字が男性語と女性語のどちらに付いているかをみると、**表４．**の通りである：

表４．『華夷訳語』における音訳漢字の男性語と女性語における分布

	男性語	女性語	合　計
八	15	3	18
巴	3	0	3
別	0	10	10
伯	4	3	7

「八」は、大部分が男性語に付いているが、女性語に付いた例も３例見られる。「巴」はすべて男性語に、「別」はすべて女性語に付いている。これにより、「八」「巴」は男性語に付く=baを、「別」は女性語に付く=beを表しており、それらは母音調和による交替形として用いられていたとみなすことができる。

男性語に付く「八」と「巴」については、「八」の使用例の方がはるかに多いことから、男性語に付く動詞過去形語尾（=ba）を表す音訳の漢字として「八」の方が一般的に用いられていたと考えられる。「八」が女性語に付いている例があるのは、母音調和による書き分けが徹底していなかったためであろうか。

「八」と「巴」が『訳語』の中でどのように用いられているかを見ると、それらの漢字の使い分けに関してひとつの傾向が明らかになる。「八」は、動詞過去形の語尾として用いられている以外には、阿八赤（1:15b5 abači, 猟人）、忽児八（1:19b8 hurba=, 翻）、八舌闌都禿孩（2:21b1 baraldu=tuqai, 商量定者）、および小字の 中合八塔孩（1:27a7 qabtaqai, 匾）を含めて合計４回用いられているに過ぎない。これに対して、「巴」は動詞過去形の語尾以外に、語頭・語中・語尾等に合計 103 回用いられている。それらの内から、次に若干の例を示す。

3:01b1　巴(ba, 俺)
1:25b7　巴舌剌温(bara'un, 右)
1:14b3　阿巴中合(abaqa, 叔)
1:10b7　撒巴(saba, 器皿)
3:02b3　中含禿巴児(qamtu-bar, 一同)
2:08b3　札撒巴速(jasa=basu, 治呵)
3:11b1　兀赤舌剌巴速(učira=basu, 遇着呵)、等々。
2:18b5　巴撒(basa, 再)
1:02a6　石巴児(šibar, 泥)
2:28b1　黯巴児(yambar, 甚麽)
1:21a3　都舌剌巴児(dura-bar, 自由)
3:16b3　脱阿巴児(to'a-bar, 数目)
2:21b4　赤荅巴速(čida=basu, 能呵)

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

これにより、同じ「ba」の音を表す「八」と「巴」のうち、動詞過去形の語尾には「八」を、それ以外の箇所には「巴」を書くという使い分けの規範があったと考えられる。

さらに、**表3**．によって動詞過去形語尾を表している「巴」の3例をみると、そのうち2例には「了也」「差了也」という傍訳が付されている。そこに「了」の字は含まれているものの、その後に「也」が付されていることによって動詞の過去形だということが分かりにくく、このために「八」の字を使わなかったのではないかという推定が成り立つ。

他方、「伯」は男性語と女性語の両方にほぼ均等に付いており、母音調和による使い分けを見て取ることはできない。

以上により、『訳語』における動詞過去形語尾の音訳漢字の使い分けを**表5**．のようにまとめることができる。カッコ内は例外的な表記であることを表す。

表5．『華夷訳語』における動詞過去形語尾を表す音訳漢字の使い分け

母音調和による交替形 ＼ 主語の数	男性語	女性語
単　数	**八**（巴）	**別**（八）
複　数	**伯**	

なお、「伯」については上に「複数」としたが、実際に複数形の主語に対応しているかどうかについては、なお検討が必要である。『訳語』では動詞過去形語尾の「伯」（=bai/=bei）は、全部で7回用いられているが、このうち2回は第1部の対訳語彙に単語として現れているもので、対応する主語が無い。残りの5回のうち、明らかに複数形の主語に対応しているものは2回であり、他は主語の数が不明（2回）か単数（1回）と見なされる。ただし、動詞過去形語尾の「伯」（=bai/=bei）の機能について詳細な検討は別の機会に譲り、本稿では問題を指摘しておくに止める。

4．『元朝秘史』全体における状況

『秘史』では、モンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表すのに「巴」「罷」「別」「畢」「伯」という5種類の漢字に加えて、「罷^{原作別}」「罷^{原作伯}」「罷^{原作八}」「罷^{原作巴}」のように4種類の割注を伴った「罷」の字が用いられている[10]。『訳語』で使われている「八」はなく、『訳語』には見られない「罷」と「畢」、および上掲の割注を伴った「罷」の字が用いられているのが特徴である。

これらの漢字の使用頻度は一様でない。『秘史』における動詞過去形語尾を表す漢字の種類と、それぞれの巻における出現頻度をまとめたのが**表6**．である[11]。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

表６．『元朝秘史』における動詞過去形語尾を表す音訳漢字の種類と出現回数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
罷原作八										1			1
巴	6	1											7
罷原作巴			1	1									2
別	1	6	1		1		1	1		1			12
罷原作別		2	25	30	21	41	16	18	8	32	23	9	225
伯									1				1
罷原作伯		1	43	48	30	40	23	15	10	15	36	26	287
罷	86	112	47	25	33	31	21	39	63	51	37	51	596
畢	10	13			4		4					1	32

『秘史』で用いられているモンゴル語の動詞過去形語尾を表す上の９種類の漢字のうち、最も頻繁に用いられているのは「罷」および「罷原作別」「罷原作伯」の３つである。しかし、それらは巻によって出現回数が大きく偏っている。つまり、第１巻と第２巻では「罷原作別」と「罷原作伯」はほとんど用いられず、もっぱら「罷」が用いられている。それに対して、第３巻以降では「罷」「罷原作別」「罷原作伯」がほぼ均等に用いられている。

すでに見たように、第３巻以降に多く現れる「罷原作別」や「罷原作伯」等における「原作～」といった割注は、元来「別」「伯」と書かれていたものを「罷」に書き換えたということを表している。陳垣氏は、第１巻と第２巻でも第３巻以降と同様、「別」「伯」を「罷」に書き換えたが、その際に割注を付さなかったと推定している。上の表に見られる「巴」「別」「伯」という少数の漢字は、こうした書き換えから漏れた「残留形」であると考えられる。陳氏は、残留形の見られない「八」の字は最初から用いられていなかったであろうとしているが、これは妥当な推定と思われる。

陳（1934：14b-15a）は「十二 元秘史了字原譯残留未改表」において、「巴」を１例と「別」を６例挙げている。しかし、**表６**．に見るように、「巴」は７例、「別」は12例あり、さらに「伯」の１例が見落とされている。それらを含めた残留形のすべてを**表７**．に掲げる[12]。

表７．『元朝秘史』における動詞過去形語尾「巴」「別」「伯」の残留形

（※印は、陳垣氏の「元秘史了字原譯残留未改表」に無いもの）

巴（７例）

01:21:03　多汪中豁惕巴（dongqot=ba, 作聲）※

01:32:05　阿巴（a=ba, 有来）※

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

01:32:07　阿巴（a=ba, 有来）※

01:35:05　兀中合巴（uqa=ba, 覺）※

01:42:05　勺勒中合巴（ǰolqa=ba, 遇着）※

01:43:06　禿兀巴（tu'u=ba, 落了）

02:22:02　阿巴（a=ba, 有来）※

別（12例）

01:21:05　客額別（ke'e=be, 說了）

02:02:01　兀窟別兀（ükü=be ǖ, 死了）※

02:02:10　兀窟別兀（ükü=be ǖ, 死了）※

02:21:02　兀者克迭別（üǰekde=be, 被見来）※

02:25:10　斡克別（ök=be, 與了）

02:33:07　客額別（ke'e=be, 說了）

02:43:09　迭兀児別（de'ür=be, 馱了）

03:05:03　含帖舌列別（hemtere=be, 半了）

05:13:07　那都別古（nödü=be gǖ, 擣了）※

07:36:09　兀者別余兀（üǰe=bey üü, 見了麼）※

08:19:04　古舌児別者（gür=be ǰe, 到了）

10:29:10　耶乞別（yeki=be, 做甚来）※

伯（1例）

09:01:08　阿伯（a=bai, 有来）※

陳氏の一覧表から漏れた例の大半は漢語の訳語「了」が付されていないものであるが、「了」の字が付されていても「巴」「別」「伯」の後に疑問や語気の助辞が付いていて動詞の過去形だということが一見して分かりにくくなっているものも見られる。

次に、『秘史』において動詞過去形語尾として用いられている「畢」の全例を掲げる[13]。

表8.『元朝秘史』における動詞過去形語尾「畢」（全32例）

（※印は、陳垣氏の「元秘史了字譯畢表」に無いもの）

01:07:02　脱舌列兀勒畢（töre'ül=bi, 生了）

01:10:05　脱舌列温畢勒[!]（töre'ül=bi, 生了）[14]

01:11:02　脱舌列温勒畢（töre'ül=bi, 生了）

01:12:06　鳴詁列畢（ügüle=bi, 説了）

01:12:07　脱舌列温畢勒[!]（töre'ül=bi, 生了）[15]

01:14:05　客額畢（ke'e=bi, 説了）

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

01:14:06　孛勒畢（bol=bi, 做了）

01:23:06　可兀[舌]列畢（kö'üre=bi, 児生了）[16]

01:24:05　脱舌列兀勒畢（töre'ül=bi, 生了）

01:41:06　脱舌列畢（töre=bi, 生了）

02:02:10　孛勒畢（bol=bi, 做了）

02:06:02　帖只額畢（tcǰi'e=bi, 養了）

02:06:03　古児畢（gür=bi, 到了）

02:08:07　客額畢（kc'e=bi, 説了）

02:12:08　卯兀剌畢（mawula=bi, 煩惱了）

02:42:09　客額畢（kc'e=bi, 説了）

02:43:03　孛思畢（bos=bi, 起了）

02:45:02　客額畢（kc'e=bi, 説了）

02:45:04　客額畢（kc'e=bi, 説了）

02:45:05　兀中合畢（uqa=bi, 省）※

02:45:06　亦舌列畢（ire=bi, 来了）

02:45:06　客額畢（kc'e=bi, 説了）

02:46:09　客額畢（kc'e=bi, 説了）

05:22:10　約舌児赤畢（yorči=bi, 去了）

05:22:10　客額畢（kc'e=bi, 説了）

05:23:10　撒兀畢（sa'u=bi, 坐了）

05:25:01　嘯兀舌列勒畢（sewürcl=bi, 嘆息子[了]）[17]

07:10:02　孛勒畢（bol=bi, 做了）

07:10:08　孛勒畢（bol=bi, 做了）

07:29:08　孛勒畢（bol=bi, 做了）

07:29:09　孛勒畢（bol=bi, 中了）

12:22:01　孛勒畢（bol=bi, 做了）

これは陳氏の「十 元秘史了字譯畢表」に対応するものである。陳氏の表では31例が示されているが、ここでは「了」の訳が付されていない１例（※印）を補った。

『秘史』では第１・２巻と第３巻以降では、モンゴル語の漢字音訳方式にいくつかの点で相違があることが知られている。モンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表す音訳漢字も、そうした相違を示す特徴のひとつである。以下では、『秘史』における動詞過去形語尾を表す漢字使用の状況を第１・２巻と第３巻以降とに分けて考察する。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

5.『元朝秘史』第1・2巻における状況

『秘史』の第1巻と第2巻ではモンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表すのに「巴」「罷」「別」「畢」という4つの漢字に加えて、「罷^{原作別}」および「罷^{原作伯}」という2つの表記が用いられている。このうち「罷」は198回と最も多く、「畢」は23回現れる。それ以外の漢字はいずれも出現回数が少なく、「巴」と「別」がそれぞれ7回、「罷^{原作別}」が2回、「罷^{原作伯}」が1回である。

それぞれの漢字の各巻における出現回数をみると、**表9.** のようになる。

表9.『元朝秘史』第1・2巻における動詞過去形語尾の音訳漢字の種類と出現回数

	第1巻	第2巻	計
巴	6	1	7
別	1	6	7
罷^{原作別}	0	2	2
罷^{原作伯}	0	1	1
罷	86	112	198
畢	10	13	23

「罷^{原作別}」および「罷^{原作伯}」という表記は第3巻以降には頻出する形であるが、ここでは第2巻の第1丁と第2丁に次の3例が見られるに過ぎない。

02:01:04　亦^{舌}列罷^{原作別}（irc=ba[=bc], 来了）[18)]

02:01:06　亦^{舌}列罷^{原作別}（irc=ba[=bc], 来了）

02:02:03　孛魯罷^{原作伯}（bol=ba[=bai], 做了）

ここで、第2巻の第1丁と第2丁における音訳方式の特殊な位置づけについて述べておきたい。栗林（2003：xiii-xiv）が指摘するように、『秘史』第2巻の第1丁と第2丁――より正確には、第2巻の第69節と70節（第1丁から第2丁の6行目まで）――は、次の点で第3巻以降の音訳方式と合致している。すなわち、モンゴル語の音節末の子音 r を表すために、第1巻と第2巻では「児」の字を用いるのに対し、第3巻以降では小さい「^{舌}」の字を付した「^{舌}児」の字を用いている。ところが、第2巻では第69節と第70節に限って第3巻以降と同様に「^{舌}児」の字が用いられているのである。

モンゴル語の動詞過去形語尾の音訳で「罷^{原作別}」と「罷^{原作伯}」を用いるのも、これと全く軌を一にしている。つまり、第2巻の第69節と第70節だけ「罷」に割注がつけられているのは、第3巻以降の音訳方式と合致している。したがって、第2巻では最初の2節（第69節と第70節）は、第1巻と第2巻の他の部分と区別して扱う必要がある。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

なぜ、第2巻の最初の2節（第69節と第70節）だけが第1巻と第2巻の他の箇所とは異なり第3巻以降と同じ音訳方式になっているのかは、興味深い問題である。Hung（1951：461）は、第1・2巻と同様に第3巻以降も割注のない「罷」が書かれていたものを、末巻（第12巻）から「罷[原作別]」「罷[原作伯]」のように割注をほどこす作業が行われ、第3巻で終ったものであろうと推定している[17]。しかし、作業の手順として最後の巻から始めて順次巻を遡るというのは不自然であり、第2巻の最初の2節を手掛けたところで中止するというのも特別な理由なくしてはありそうに無い。さらに、何よりも、Hung氏は「罷」に「[原作別]」「[原作伯]」という割注を付ける作業がモンゴル語の母音調和にしたがって機械的に行われたと見なしているが、これは受け容れ難い。後に見るように（**表17.**）、「別」はほとんどの場合女性語に付いているが、「伯」は男性語と女性語の両方にほぼ均等に付いており、これらを母音調和による交替形と見なすことは当たらない。Hung（1951：461）も、割注を施す作業が「完全なものでも正確なものでもなかった（Their work was neither thorough nor accurate, ...）」と書いているが、そもそも「[原作別]」や「[原作伯]」は、「罷」に後から母音調和によって機械的に付けられたと考えることには無理がある。元来「別」や「伯」が書かれていたものを「罷」と書き換えて「[原作別]」や「[原作伯]」といった割注を付けたと考えるのが最も素直で自然な見方であろう。

また、小澤（1994:218-219）は、ウイリアム・フン氏の説として、動詞過去形接尾辞として元来全巻に書かれていたであろう「巴」「別」「伯」を「罷」に書き換える作業が末巻（第12巻）から着手されて、第3巻を終え、第2巻の最初の2節を終えた段階で「一息入れた」としているが、Hung（1951：461）の内容とは趣旨が異なる。これを小澤氏自身の説としても[19]、第1巻と第2巻になぜ割注が施されなかったかについては何も語っていない。

筆者は、これに関して、陳垣氏と同様に、元来全巻を通して「別」と「伯」が書かれていたものがすべて「罷」に書き換えられ、その際第1巻と第2巻では割注を付けずに、第3巻以降では割注を付けて書き換えが行われたものと考える。第2巻の最初の2節だけが第3巻以降と同じ方式なのは、全巻がその様に音訳された後で、何らかの事情によってこれらの2節が書き換えられ、元の節と差し替えられたのではないかと考える。第2巻の最初の2節を書き換える際には（おそらく表記方式の違いを意識しないままに）第3巻以降の音訳方式が使われたのではあるまいか。

『アルタン・トブチ』（1990：15b）では、『秘史』の第69節と第70節の間に、父イェスゲイ・バートルが亡くなって、テムジンが地に打ち伏して嘆いていたところ、ホンゴタン部のチャクラ老人が「なぜ嘆くのか、兵を固めようと言い合ったではないか。なぜ嘆くのか、広大な国を建てようと言い合ったではないか」と諫めて、泣くのを止めさせたという逸話が書かれている。第2巻の最初の2節が書き換えられた可能性と、この逸話が『秘史』で省略されていることと関係あるとは考えられないだろうか。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

次に、母音調和の観点から、これらの漢字で表される動詞過去形語尾が男性語と女性語のどちらに付いているかをみると、**表10.** のとおりである。

表10.『元朝秘史』第1・2巻における音訳漢字の男性語と女性語における分布

	男性語	女性語	合　計
巴	7	0	7
別	0	7	7
罷[原作別]	0	2	2
罷[原作伯]	1	0	1
罷	128	70	198
畢	5	18	23

「巴」はすべて男性語に、「別」（および「罷[原作別]」）はすべて女性語についており、それらは『訳語』の場合と同様、動詞過去形語尾=ba/=be の母音調和による交替形と見なすことができる。他方、「罷[原作伯]」「罷」「畢」に関しては、上の数字から何らかの有意性を認めることはできない。

『秘史』の第1・2巻で多く用いられているのは「罷」と「畢」である。このうち「畢」は女性の主語に対応して用いられる女性形語尾であり、それ以外のすべての場合に「罷」が用いられている。いずれも、男性語にも女性語にも付いており、母音調和による書き分けは認められない。これに基づき、「罷」は男性語、女性語に関わり無く、動詞過去形語尾 =ba/=be を表すのに用いられており、「畢」も男性語、女性語に関わり無く、女性主語に対応する動詞過去形語尾 =bi を表すのに用いられているとみなすことができる。

『秘史』の第1・2巻におけるモンゴル語の動詞過去形語尾を表す漢字の使い分けは、**表11.** のようにまとめることができる。カッコ内は例外的な表記であることを表す。

表11.『元朝秘史』第1・2巻における動詞過去形語尾の音訳漢字の書き分け

<table>
<tr><td colspan="2">母音調和による交替形
主語の数と性</td><td>男性語</td><td>女性語</td></tr>
<tr><td rowspan="2">単　数</td><td>女性</td><td colspan="2">畢</td></tr>
<tr><td>男性</td><td>（巴）</td><td>（別、罷[原作別]）</td></tr>
<tr><td>複　数</td><td colspan="3">罷
（罷[原作伯]）</td></tr>
</table>

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

少数ではあるが「巴」「別」が残留形として存在することによって、第１・２巻において「罷」が元来これらの漢字で書かれていたという推定が成り立つ。第１・２巻には「伯」の残留形は見られないが、第２巻の第２丁に１回だけ現れる「罷原作伯」という表記（02:02:03 孛魯罷原作伯，做了）は、『秘史』の第１・２巻においても動詞過去形語尾として「伯」が書かれていたことを示す例として貴重である。こうして、『秘史』の第１・２巻では、動詞過去形語尾「罷」は、元来「巴」「別」「伯」と表記されていたと推定することができる。

表７．で見たように、書き換えに漏れた「巴」と「別」の多くは漢語訳「了」を持たないものであった。これから、「巴」「別」等の動詞過去形語尾を「罷」に書き換えるに際には傍訳の「了」を手懸りにしたことは明らかである。書き換えから漏れたのは、これらに「了」の傍訳が付されていなかったために見逃されたに違いない。陳垣氏は同様に漢語訳の「了」を手懸りに「巴」「別」「伯」等の漢字の調査を進めて、これらの「巴」「別」を見落とした。数百年を隔てて全く同じことが繰り返されたわけである。

「罷」に書き換える前の状態を推定すると、**表 12**．のように表すことができる。なお、参考までに左端に『訳語』の状態を示す。

表 12.『元朝秘史』第１・２巻における動詞過去形語尾の音訳漢字

<table>
<tr><th>『華夷訳語』</th><th>書き換えらる前</th><th>現行本</th></tr>
<tr><td>八</td><td rowspan="2">巴</td><td rowspan="4">巴（残留形７）
別（残留形７）
罷</td></tr>
<tr><td>巴</td></tr>
<tr><td>別</td><td>別</td></tr>
<tr><td>伯</td><td>伯</td></tr>
<tr><td></td><td>畢</td><td>畢</td></tr>
</table>

「罷」に書き換えられた漢字が「巴」と「別」の２種類だけだったとすれば、書き換えられる前の漢字は男性語で「巴」、女性語で「別」があったと推定することは容易である。しかし、「巴」と「別」だけでなく「伯」も「罷」に書き換えられたとすると、書き換えられる前にどこに「伯」があったのかを推定することは容易でない。

ここで『秘史』に対応するモンゴル語のテキストを多く含む『アルタン・トブチ（Altan tobči）』のテキストを参照することによって、書き換えられる前の漢字を推定する手懸りを得ることができる。『アルタン・トブチ』のモンゴル語テキストを調査すると、動詞過去形語尾の (=bai/=bei) は『秘史』の第１巻に相当する箇所（4b-15a）に 11 回、第２巻に相当する箇所（15b-25a）に 32 回用いられている[20]。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

『アルタン・トブチ』のテキストは『秘史』と完全に一致するものでもなければ、『秘史』の原本の形をそのまま伝えるものでもなく、独自の脱落・誤記・編集といった改変が行われたことは十分に考えられる。たとえば、『アルタン・トブチ』には『秘史』の「畢」に対応する動詞過去形語尾  (=bi) という形がない。これは、『アルタン・トブチ』を編集し、あるいは書写する際に、すでに古形として用いられなくなっていた女性の主語に対応する動詞過去形語尾  (=bi) を  (=ba/=be) あるいは  (=bai/=bei) に書き換えたことが考えられる。モンゴル文字において、 (=bi) と  (=bai/=bei) の字形が類似していることから、 (=bi) を  (=bai/=bei) とみなして書写したということは、大いにありうる。実際、次に見るように (**表 13.**)『秘史』で「畢」(=bi) が書かれている箇所に『アルタン・トブチ』で  (=bai/=bei) が書かれている例も少なからず存在する。

次に、『アルタン・トブチ』で  (=bai/=bei) のついた動詞過去形が、『秘史』でどのような形と対応しているかを**表 13.** に示す。表の中で●印をつけたものは、『秘史』で漢字「畢」が用いられている箇所である[21]。

表 13.『元朝秘史』第１・２巻における動詞過去形語尾と『アルタン・トブチ』の =bai/=bei との対応

『秘史』第１巻	
『アルタン・トブチ』	『元朝秘史』
5b:02　törö=bei	01:07:02　脱[舌]列兀[勒]畢(törc'ül=bi, 生了)●
6a:07　törö=bei	01:10:05　脱[舌]列温畢[勒][!](törc'ül=bi, 生了)●
6a:09　törö=bei	01:11:02　脱[舌]列温[勒]畢(törc'ül=bi, 生了)●
6a:22　csc quγul=bai	01:12:02　[中]忽[中]忽侖 牙荅罷(ququl=u=n yada=ba,折折不能了)
6a:25　törö=bei	01:12:07　脱[舌]列温畢[勒][!](törc'ül=bi, 生了)●
6b:14　törö=bei	01:14:02　脱[舌]列罷(törc=bc, 生了)
6b:24　abulča=bai	01:15:01　阿不[勒]察罷(abulča=ba, 相要了)
7a:30　yabulča=bai	01:18:05　迓歩[勒]都罷(yabuldu=ba, 共行了)
11b:05　dcbsc=bei	01:39:06　迭[卜]薛罷(dcbsc=bc, 跳躍了)
13b:30　yorči=bai	01:42:03　約児赤罷(yorči=ba, 去了)
15a:24　nögči=bei	01:49:06　那[克]赤罷(nökči=be, 歿了)
『秘史』第２巻	
『アルタン・トブチ』	『元朝秘史』
15b:24　bol=bai	02:02:03　孛魯罷[原作伯](bol=bai, 做了)

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

16b:13　nögčiye=bei	ナシ
16b:17　teǰiye=bei 16b:21　teǰiye=bei	02:06:02　帖只額畢(teǰi'e=bi, 養了)●
17a:03　kUr=bei 17a:06　kUr=bei	02:06:03　古児畢(gür=bi, 到了)●
17a:15　teǰiye=bei	02:07:04　帖只額罷(teǰi'e=be, 養了)
17a:27　buli=bai	02:07:09　不里周 阿不罷(buli=ǰu ab=u=ba, 奪着 要了)
17b:07　bol=bai	02:08:07　備(büi, 有)
17b:25　külči=bei	02:10:04　古里徹罷(güliče=be, 等了)
17b:27　od=bai	02:10:06　斡惕罷(ot=ba, 去了)
19a:10　tarqa=bai	02:17:04　塔児中合罷(tarqa=ba, 散了)
19a:16　oro=bai	ナシ
19a:24　bederi=bei	02:18:07　別迭舌列罷(bedere=be, 排尋了)
19a:29　od=bai	ナシ
19b:22　qari=bai	02:21:03　那克赤罷(nökči=be, 過去了)
20a:03　yorči=bai	02:22:04　約児赤罷(yorči=ba, 去了)
20a:23　bol=bai	ナシ
20a:24　bol=bai	ナシ
20b:30　od=bai	02:27:10　約児赤罷(yorči=ba, 去了)
21a:01　qočor=bai	02:27:10　中豁綽児罷(qočor=ba, 落後了)
21b:18　γar=bai	02:30:09　中合児罷(qar=ba, 出来了)
22a:28　küncsülcgül=bei	02:35:04　古捏速列温[勒]罷(günesülc'ül=be, 行糧教做了)
22b:10　od=bai	02:36:08　斡[惕]罷(ot=ba, 去了)
22b:16　üǰe=bei	02:37:02　兀者罷(üǰe=be, 見了)
22b:18　egüske=bei	02:37:03　額兀思格罷(e'üsge=be, 送將去了)
22b:24　ire=bei	02:37:06　亦舌列罷(ire=be, 来了)
23a:28　bayasulča=bai	ナシ
23b:20　bos=bai	02:43:03　孛思畢(bos=bi, 起了)●
24a:01　γar=bai	02:44:05　中合児罷(qar=ba, 上了)
24a:26　od=bai	02:46:04　斡惕罷(ot=ba, 去了)
24b:26　ab=u=bai	02:49:01　阿不罷(ab=u=ba, 要了)

上の表のうち、『アルタン・トブチ』の =bai/=bei に対応している『秘史』の「罷」は、元来

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

「伯」と書かれていた可能性がある。さらに、それらの動詞に対応する主語の数等を検証する必要があるが、本稿ではこの可能性を指摘しておくにとどめる。

6.『元朝秘史』第3巻以降における状況

『秘史』の第3巻以降においてモンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表記するのに用いられている漢字は主として「罷」(398 例)、「罷原作別」(223 例)、「罷原作伯」(286 例) の3つであり、それ以外に少数であるが「畢」(9 例)、「別」(4 例)、「伯」(1 例)、「罷原作八」(1 例)、「罷原作巴」(2 例) といった表記が用いられている。

それぞれの漢字の出現回数を巻ごとに示せば、**表 14.** の通りである。(空欄はゼロ回を表す。)

表 14.『元朝秘史』第3巻以降における動詞過去形語尾の音訳漢字

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
罷原作八								1			1
罷原作巴	1	1									2
別	1		1		1	1		1			5
罷原作別	25	30	21	41	16	18	8	32	23	9	223
伯							1				1
罷原作伯	43	48	30	40	23	15	10	15	36	26	286
罷	47	25	33	31	21	39	63	51	37	51	398
畢			4		4					1	9

第3巻以降では、第1・2巻と違って割注を伴った「罷原作別」と「罷原作伯」が頻繁に用いられているのが特徴である。上述のように、これらは元来それぞれ「別」「伯」と書かれていたことを示しており、「別」(5回) と「伯」(1回) は、書き換えから漏れた残留形と考えられる。

一方、第3巻以降で「罷原作八」が1回、「罷原作巴」が2回現れているが、これはどのようなことを意味しているのであろうか?

表 15.『元朝秘史』における「罷原作巴」と「罷原作八」の現れ

罷原作巴 (2例)

03:44:05　孛[勒]中合罷原作巴(bo[l]qa=ba, 教做了)

04:03:08　阿剌[黒]荅罷原作巴(ala[q]da=ba, 被殺了)

罷原作八 (1例)

10:14:07　斡舌羅兀[勒]罷原作八 (oro'ul=ba, 教入了)

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

第３巻以降で「別」と「伯」が「罷^{原作別}」と「罷^{原作伯}」に書き換えられた際に、「巴」と「八」も「罷^{原作巴}」と「罷^{原作八}」に書き換えられたとすれば、その時点で「巴」は２個だけ、「八」は１個だけしかなかったということになる。つまり、「罷^{原作巴}」という表記が元来「巴」と書かれていたとすれば、割注をもたない「罷」の字は「巴」ではなかったことになる。「罷^{原作八}」に関しても同様で、「罷^{原作八}」という表記が元来「八」と書かれていたとすれば、割注をもたない「罷」の字は「八」ではなかったはずである。

こうしてみると、割注の付されていない「罷」は、「罷^{原作別}」「罷^{原作伯}」「罷^{原作八}」「罷^{原作巴}」等の割注を伴う書き換えが行われた時点で、すでに「罷」であったと考えざるを得ない。「巴」（および「八」）が書かれていた段階があったとしても、それらはすでに「罷」に書き換えられていたと考えられる。こう考えると、書き換えは少なくとも２回行われたことになる。最初に「巴」（および「八」）が「罷」に書き換えられ、動詞過去形の語尾としては「罷」「別」「伯」という３つの漢字が用いられた。そして次の段階で、「別」と「伯」が「罷^{原作別}」「罷^{原作伯}」に書き換えられ、残留形の「八」と「巴」も「罷^{原作八}」と「罷^{原作巴}」に書き換えられたと考えられる。

これをまとめると、**表 16.** のように表すことができる。（「畢」に関しては後述する。）

表 16.『元朝秘史』第３巻以降における動詞過去形語尾を表す音訳漢字の書き換え

それ以前	書き換える前	現行本
八	八（残留形１）	罷^{原作八}（１）
巴	巴（残留形２）	罷^{原作巴}（２）
畢？	罷	罷
別	別	別（残留形５） 罷^{原作別}
伯	伯	伯（残留形１） 罷^{原作伯}

第３巻以降における動詞過去形語尾「畢（=bi)」の現れも極めて限られていることに注意を払っておきたい[20]。これは、女性の主語に呼応して用いられる語尾であるが、第 155 節（３回）、156 節（１回）、189 節（２回）、194 節（２回）、272 節（１回）と、出現位置が部分的に偏っており、それ以外の箇所では主語が女性であってもこの形は用いられていない。「罷^{原作畢}」という形がないことからしても、「畢」もまた「巴」（および「八」）が書き換えられるのと同じ時点で「罷」に書き換えられたという推定も成り立つ。『秘史』の第３巻以降に９回現れる「畢」は、残留形というよりはむしろ、そうした書き換えの後で、別の方式で書かれた節が挿入された可能性も否定できない。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

上に述べたことをまとめると、まず「八」「巴」（および「畢」）がすべて「罷」に書き換えられ、「罷」「別」「伯」という3つの漢字が用いられていた段階があった。その後、「別」と「伯」をそれぞれ「罷$^{原作}_{別}$」と「罷$^{原作}_{伯}$」に書き換えて現行本が成ったと考えられる[22]。

母音調和の観点から、動詞過去形語尾を表す8種類の漢字が男性語と女性語のどちらに付いているかをみると、**表17.** のとおりである。

表17.『元朝秘史』第3巻以降における音訳漢字の男性語と女性語における分布

	男性語	女性語	合計
罷$^{原作}_{八}$	1	0	1
罷$^{原作}_{巴}$	2	0	2
別	0	5	5
罷$^{原作}_{別}$	1	222	223
伯	1	0	1
罷$^{原作}_{伯}$	142	144	286
罷	321	77	398
畢	7	2	9

数は少ないが、「罷$^{原作}_{八}$」と「罷$^{原作}_{巴}$」はすべて男性語に付いて =ba を表しており、「別」は女性語に付いて =be を表していることを確認することができる。「罷$^{原作}_{別}$」は、223 例のうち1例以外すべて女性語に付いて =be を表している。「罷$^{原作}_{別}$」が男性語に付いている1例（11:14:07 保兀罷$^{原作}_{別}$、下了）は、十五巻本では「罷$^{原作}_{伯}$」となっており、誤記の可能性が大きい[23]。

「罷」は、398 例のうち大半が男性語に付いているが、女性語に付いているものが 77 例（全体の約2割）見出される。「罷」が「八」と「巴」を書き換えたものとすれば、女性語に付いている「罷」は不規則な現れであり、女性語に付く表記としては「罷$^{原作}_{別}$」が期待されるところである。しかし、上に見たように「罷」に書き換えた漢字は「八」「巴」だけでなく「畢」もあった可能性があり、女性語に付いている「罷」の一部はこれに起因している可能性がある。

「罷」（割注なし）が女性語に付いている原因としては、単純に割注を付け忘れたということも考えられる。さらに、もうひとつの可能性としては、この方式に注意を払わないで書写された部分（節や丁）が、継ぎ合わされているということも考えられない訳ではない。

付録資料の2．に『秘史』3巻以降の各節で女性語に付いている「罷」（割注なし）と「罷$^{原作}_{別}$」の出現回数を表にして示した。

巻ごとの状況を見ると、第6巻、第7巻、第8巻では女性語に「罷」（割注なし）が付いている例はほとんど無いのに対して、第3巻、第9巻、第10巻では女性語に「罷」（割注なし）が

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

付いている例は全体の４割から７割にも達している。

節ごとの現れについて目立った箇所を指摘すると、[104] [105] [106] [107] [108] という連続した５つの節では、女性語の動詞語幹に過去形語尾「罷^{原作別}」が付いているのは２語に過ぎないが、「罷」(割注なし)が付いているのは13語におよぶ。また、[219] [220] [221] [222] [223] の５つの節では、女性語に「罷」(割注なし) が付いているものは９回で、「罷^{原作別}」は１回も現れない。[231] [232] [233] [234] の４つの節でも、女性語に「罷」(割注なし) が付いているものは９語で、「罷^{原作別}」は１回も現れない[24]。

このように、女性語の動詞語幹に割注の無い「罷」がついている例が特定の箇所に集中しているのは、これらの節では女性語に「^{原作別}」の割注を付すことを意識しない書写方式によって音訳が行われたのではないかという疑いが生じる。こうした書写方式の違いは、同時期に複数の写字生によって書写が行われたために方式が徹底しなかったものか、あるいは別の時期に製作された節が継ぎ合わされた可能性が考えられる。

『秘史』第３巻以降における動詞過去形語尾を表す漢字の書き分けは、**表 18.** のようにまとめることができる。カッコ内は例外的な表記であることを表す。

表 18.『元朝秘史』第３巻以降における動詞過去形語尾の音訳漢字の書き分け

母音調和による交替形 ＼ 主語の数と性		男性語	女性語
単　数	女　性	（畢）	
	男　性	罷（罷^{原作八}、罷^{原作巴}）	罷^{原作別}（別）
複　数		罷^{原作伯}（伯）	

7．まとめ

（１）『華夷訳語』ではモンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bai/=bei を表すのに「八」、「巴」、「別」、「伯」という４種類の漢字が使われており、それらは次のように使い分けられている：

八－動詞過去形語尾として用いられている 18 例のうち、15 例が男性語に付いており、もっぱら男性語に付く過去形語尾の =ba を表すのに用いられた。女性語に付いている３例は表記法が徹底していなかったためか。

巴－動詞過去形語尾として用いられているものは３例だけであるが、それらはいずれも男性語に付いて過去形語尾の =ba を表している。この漢字は一般にモンゴル語の音節 ba を表す漢字として広く用いられていることから、動詞過去形語尾の =ba には「八」が、それ以外の ba には「巴」を用いるという書き分けの規範があったと考えられる。したが

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

って、動詞過去形語尾として用いられているこの3例は例外的。

別－動詞過去形語尾として用いられている10例は、すべて女性語に付いて過去形語尾の =be を表している。

以上により、「八」と「別」は、動詞過去形語尾 =ba/=be の母音調和による交替形を表す漢字として用いられていたと考えられる。

伯－動詞過去形語尾として用いられている10例のうち、4例が男性語に3例が女性語に付いている。男性語と女性語を区別せずに、動詞過去形語尾 =bai/=bei を表す漢字として用いられていた。

（2）『元朝秘史』第1巻と第2巻では、モンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表すのに「巴」「罷」「別」「畢」という4種類の漢字と、「罷^{原作別}」「罷^{原作伯}」という2種類の割注を伴った表記が用いられている。それらのうち、「罷」と「畢」だけで全体の9割以上を占めており、その他の漢字は少数の例外的な現れである。

罷－男性語、女性語に関わり無く、動詞過去形語尾 =ba/=be を表すのに用いられている。

畢－女性主語に対応する動詞過去形語尾 =bi を表すのに用いられている。

巴－動詞過去形語尾として7回用いられており、それらはいずれも男性語に付いて過去形語尾の =ba を表している。

別－動詞過去形語尾として7回用いられており、それらはいずれも女性語に付いて過去形語尾の =be を表している。

第1巻と第2巻では、動詞過去形語尾 =ba/=be を表す漢字として元来「巴」と「別」が用いられていたと推定されるが、それらは一律「罷」に書き換えられたと考えられる。第1巻と第2巻にみられる少数の「巴」と「別」は、書き換えに漏れた残存形とみなすことができる。

罷^{原作別}－第2巻第1丁に2回だけ見られる。2回とも女性語に付いており、過去形語尾の =be を表している。

罷^{原作伯}－第2巻第2丁に1回だけ見られる。男性語に付いて、過去形語尾の =bai を表している。

「罷^{原作伯}」があることにより、第1巻と第2巻で動詞過去形語尾として元来「伯」も使われていたが、これも「罷」に書き換えられたものと考えられる。

「罷^{原作別}」と「罷^{原作伯}」は、第3巻以降に頻繁に出現する表記であり、第2巻の第1丁と第2丁（第69節と第70節）は、この点で第3巻以降の表記方法に従っている。

（3）『元朝秘史』第3巻から第12巻では、モンゴル語の動詞過去形語尾 =ba/=be, =bi, =bai/=bei を表すのに「罷」「別」「畢」「伯」という4種類の漢字、および「罷^{原作八}」「罷^{原作巴}」「罷^{原作別}」「罷^{原作伯}」という4種類の割注を伴った表記が用いられている。これらのうち、「罷」「罷^{原作別}」「罷^{原作伯}」という3種類の表記が全体の98パーセントを占めており、他の表記は少数の例外的な現れである。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

罷－動詞過去形語尾として用いられている398例のうち、321例が男性語に、77例が女性語に付いている。男性語に付く過去形語尾の =ba を表すのに用いられたと考えられる。女性語に付いている「罷」は、「罷[原作別]」あるいは「罷[原作伯]」という割注が何らかの事情で欠落したものであろう。

罷[原作別]－動詞過去形語尾として用いられている223例のうち、222例が女性語に、1例が男性語に付いている。元来は「別」と書かれていたもので、過去形語尾の =be を表している。男性語に付いている1例は「罷[原作伯]」の誤記の可能性が大きい。

罷[原作伯]－動詞過去形語尾として用いられている286例のうち、142例が男性語に、144例が女性語に付いている。元来は「伯」と書かれていたもので、男性語と女性語を区別せずに、動詞過去形語尾 =bai/=bei を表していたと考えられる。

畢－動詞過去形語尾として用いられている9例のうち、7例が男性語に、2例が女性語に付いている。女性主語に対応する動詞過去形語尾 =bi を表すのに用いられている。使用回数が少なく、現れる箇所も限られていることから、元来「畢」と書かれていたものは「罷」に書き換えられた可能性がある。

別－動詞過去形語尾として5回用いられている。それらはいずれも女性語に付いており、過去形語尾の =be を表している。

伯－第9巻に1回だけ現れる。男性語に付いており、過去形語尾の =bai を表している。

第3巻以降では元来動詞過去形語尾 =be を表す漢字として「別」が用いられていたと考えられる。「別」は「罷[原作別]」に書き換えられたが、上の「別」は書き換えから漏れた残存形と考えられる。同様に動詞過去形語尾 =bai/=bei を表す漢字として用いられていた「伯」は「罷[原作伯]」に書き換えられたが、上の1回は書き換えから漏れた残存形とみなすことができる。

罷[原作八]－第10巻に1回だけ現れる。男性語に付いて過去形語尾の =ba を表している。

罷[原作巴]－第3巻と第4巻に1回ずつ現れる。いずれも男性語に付いて過去形語尾の =ba を表している。

第3巻以降で「八」と「巴」の残存形が無く、「罷[原作八]」と「罷[原作巴]」という表記がみられることにより、これらの漢字は「別」「伯」が「罷[原作別]」「罷[原作伯]」に書き換えられる時点ですでに「罷」に書き換えられていたと考えられる。すなわち、第3巻以降では、動詞過去形語尾の書き換えは少なくとも2段階を経た。最初に「八」「巴」（および「畢」）が「罷」に書き換えられ、次に「別」と「伯」が「罷[原作別]」「罷[原作伯]」に書き換えられた。「罷[原作八]」と「罷[原作巴]」は、最初の書き換えに漏れた残存形の「八」と「巴」を後の段階で書き換えたものであろう。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

付録資料１．『元朝秘史』における動詞過去形語尾を表す漢字の諸本の対校

（※印は陳氏の「葉俄二本罷字原注不同表」に欠けているか誤っているもの）

「罷^{原作別}」と「罷^{原作伯}」のおける割注は、視認性を考慮してそれぞれ［別］［伯］ように表記する。それ以外の［］は、原文の欠字を補ったもの。

節	巻:丁:行	四部叢刊本・葉徳輝本	十五巻本（銭本）
		原作「別」	原作「伯」
120	03:35:09	亦^{舌}列罷[別]古	亦^{舌}列罷[伯] 古※
121	03:39:05	客額罷[別]	客額罷[伯]
155	05:23:03	客額罷[別]	客額罷[伯]
177	06:27:07	帖只額罷[別]	帖只額罷[伯]
247	11:02:10	亦列罷[別]	亦列罷[伯]
252	11:14:07	保兀罷[別]	保兀罷[伯]
252	11:15:06	亦^{舌}列罷[別]	亦^{舌}列罷[伯]※
		原作「別」	原作「罷」
87	02:25:10	斡$_{克}$別	斡$_{克}$罷
157	05:27:07	斡$_{克}$罷[別]	斡$_{克}$罷
189	07:09:08	亦捏額罷[別]	亦捏額罷※
		原作「伯」	原作「別」
122	03:41:01	亦^{舌}列罷[伯]	亦^{舌}列罷[別]
146	04:46:08	帖別^{舌}灘$_{勒}$都罷[伯]	帖別^{舌}灘$_{勒}$都罷[別]
146	04:47:04	亦^{舌}列罷[伯]古	亦^{舌}列罷[別] 古※
149	05:04:09	亦^{舌}列罷[伯]	亦^{舌}列罷[別]
173	06:14:08	約^{舌}児赤罷[伯]	約^{舌}児赤罷[別]
		原作「伯」	原作「罷」
115	03:25:01	亦出罷[伯]	亦出罷※
		原作「巴」	原作「伯」
129	04:03:08	阿剌[黒]荅罷[巴]	阿剌$_{黒}$荅罷[伯]
誤記			
171	06:07:07	客額罷[別]	客額罷[行][25]
208	08:44:10	不桑^{中}合$_{黒}$荅罷[伯]	不桑合$_{黒}$荅罷[白][26]

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

付録資料２.『元朝秘史』で女性語の語幹に付いている「罷」と「罷原作別」

第３巻

節	罷	罷原作別
104	2	1
105	4	
106	4	1
107	1	
108	2	
110	1	
112	3	
118		5
119		2
120		1
121		3
122		1
124		7
125		4
小計	17	25

第４巻

節	罷	罷原作別
131		1
134		3
136	1	1
137		5
140		5
142		1
144	2	
145	2	10
146		2
147		2
小計	5	30

第５巻

節	罷	罷原作別
149	1	4
150		1
151	1	2
152		2
153	1	
154	1	
155		2
156	1	1
157		1
158		1
160	1	
163		4
164	1	2
169		1
小計	7	21

第６巻

節	罷	罷原作別
170	1	1
171		2
172		4
173		3
174		3
175		1
177		10
178		1
179		2
180		1
181		5
183		3
184		2
185		3
小計	1	41

第７巻

節	罷	罷原作別
186		2
187		1
188		1
189		3
190		4
191		1
194		1
195		1
196		1
197		1
小計	0	16

第８巻

節	罷	罷原作別
198		1
199		1
201	1	2
202		1
203		6
205		2
206		1
208	1	4
小計	2	18

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

第9巻

節	罷	罷原作別
209		5
212	1	
213	1	1
214	3	1
215		1
219	4	
220	2	
221	1	
222	1	
223	1	
225	1	
227	1	
229	1	
小計	17	8

第10巻

節	罷	罷原作別
230		2
231	1	
232	5	
233	1	
234	2	
236	1	
237	1	
238		1
239	1	5
241	2	
242	1	7
243		7
244	1	4
245	2	4
246		2
小計	18	32

第11巻

節	罷	罷原作別
247	1	1
248		1
249		1
252	2	3
253		1
254	1	2
255		8
257	1	2
258	1	3
259		1
小計	6	23

第12巻

節	罷	罷原作別
267		2
268		1
272	1	1
276		1
277	1	2
281	2	2
小計	4	9

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

［注］

本稿は2004年8月16-20日に中国の呼和浩特（フフホト）市で開催された「内蒙古大学第４回蒙古学学術討論会」における発表をもとに加筆・補正したものである。

1）『華夷訳語』の種類とそれらの呼称については、石田（1931）を参照。

2）たとえば、

「睫」（まつげ）を表す「莎児眉孫」（３番目の漢字に「眉」）

「綿布」を表す「博絲」（2番目の漢字の偏と旁に「糸」）

「梳」（くし）を表す「毵」（旁に「毛」）、等。

3）出現位置を表す 3:21a2 は、「第３部：第21丁表の２行目」を表す。以下同様。

ここでは、すべての例を網羅しようとしたものではなく、複数回現れる形であっても例として１回だけ掲げた。また「来了時分」「来了的」「来了呵」「来了有」等の漢語訳に対応する動詞活用形は含めていない。

4）陳氏は、「(原作) 別」が付くか「(原作) 伯」が付くかは動詞によって決まると考えていたように思われる。陳（1934:13b-14b）の「十一 元秘史罷字原譯伯別互用表」では、同一のモンゴル語の動詞に「(原作) 別」が付く場合と「(原作) 伯」が付く場合を具体的に示している。これらが混用の事例として示されたものとすれば、この章は現在意味を持たない。

5）小澤（1979：61-65）では、主語の男性と女性に対応する「男性形／女性形」の対立、単数と複数に対応する「単数形／複数形」の対立に加えて、主語が話者から見て尊敬すべき対象であるかどうかを示す「指上形／指下形」という対立を設けているが、ここでは「指上形／指下形」については触れない。

6）Cleaves（1952）は、その影印本である。この『アルタン・トブチ』はモンゴルの同名の歴史書と区別するために『ロブサンダンジンのアルタン・トブチ』あるいは『アルタン・トブチ・ノヴァ』と呼ばれることもある。

7）服部（1946:139）によれば、「八」「巴」「別」「伯」の音訳当時の推定音は、次の通りである。（推定音の右肩の数字 1, 1', 2 は、それぞれ「陰平」「陽平」「上声」を表す。）

八（pa'^{2}）　巴（pa^{1}）　別（piɛ'$^{1'2}$）　伯（pai'^{2}）

8）ローマ字転写は Ligeti（1972）に若干の補正を加えた栗林（2003）の方式による。この転写方式では、同じ「八」という漢字を、男性語では「ba」（例：察㭎八 čat=ba）とし、女性語では「be」（例：篾迭八 mede=be）と転写している。これはモンゴル語の母音調和を考慮した上での機械的な書き分けであって、漢字自体にこの区別はない。「伯」を男性語で「bai」（例：阿伯 a=bai）、女性語で「bei」（例：必赤伯 bičі=bei）と転写しているのも同様である。

9）ローマ字転写 bol<u>qa=ba は、u が衍字であり bolqa=ba と読むべきことを表す。以下同様。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

10) 服部（1946:139）によれば、「罷」と「畢」の音訳当時の推定音は、次の通りである。（推定音の右肩の数字2,3は、それぞれ「上声」と「去声」を表す。）

罷（pa^3, pai^3）　　畢（pi'^2）

11) 四部叢刊本による。表の最上段の数字は巻数を表し、表の中の数字は出現回数を表す。空欄は、出現回数ゼロ。陳（1934：12a-12b）は、「九 元秘史了字譯罷表」で「罷原作八」「罷原作巴」「罷原作剔」「罷原作伯」および「罷」の巻ごとの出現回数を示しているが、ここでは改めて全巻を調査し、陳氏の表の中で間違っている若干の数字を訂正した。

12) 出現位置を表す数字 01:21:03 は「第1巻：第21丁：第3行目」を表す。ローマ字転写は、Ligeti（1971）に基づき、それに若干の補正を加えた栗林・确精扎布（2001）の方式による。

13) 额尔登泰・乌云达赉・阿萨拉图（1980：25-27）は、『秘史』に全32回現れる「畢（=bi）」の語尾をもつ文の例を示した上で、動詞の主語は、女性が26例、男性が3例、それ以外に「運命」、「規律」、「犬の吠え声」が各1例あることを指摘している。小澤（1979：65-67）は、畢（=bi）が使われるのは①主語が女性である時（多少の例外あり）②目的語が女性である時③主語および目的語に女性及び女性に関する限定語（限定句）がある場合、としているがなお検討が必要である。

14)「脱舌列温畢勒」は、「脱舌列温勒畢」の誤。小字「勒」の位置が間違っている。

15) 同上。

16)「可兀[舌]列畢」は、小字「舌」が脱落しているため補ったことを表す。

17)「嘆息子[了]」は、「嘆息子」が「嘆息了」の誤記であることを表す。

18) 以下、煩雑さを避けて ire=ba[=be] といった転写を ire=be とのみ記す。

19) これによれば、「巴」「別」「伯」を、割注を付しながら「罷」に書き換える作業が末巻（第12巻）から着手されて、第3巻を終え、第2巻の最初の2節を終えた段階で「一息入れた」後、それから先は割注を付けないで「罷」に書き換えたことになる。

20) モンゴル文字は先古典期の字形（字体）で表した。

21)『アルタン・トブチ』のローマ字転写方式は、Ligeti（1971）による。動詞の語幹と語尾の境界を表す「=」の記号は栗林が補った。また、表の中の「古捏速列温[勒]罷」および「斡[惕]罷」のように、カギカッコで囲んだ[勒][惕]は、原文でこれらの字が脱落しているため、補ったことを表す。

22)『秘史』の第1・2巻においても、第3巻以降と同様なことが行われた可能性もある。つまり、第1・2巻では「巴」「別」「伯」が同時に「罷」に書き換えられたのではなく、まず「巴」が「罷」に書き換えられ、「罷」「別」「伯」という3つの漢字が用いられていた段階があり、その後で「別」と「伯」が「罷」に書き換えられた、という推定である。ただし、これはあくまでも推定に止まる

23)『秘史』の十五巻本テキストは、『元朝秘史三種』（中文出版社、1975）による。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

24) 節の番号をかぎカッコ（[]）に入れて示した。

25)「行」は「別」の誤記。

26)「白」は「伯」の誤記。

[引用・参考文献]

Altan tobči　1990

erten-ü qad-un ündüsülegsen törö yosun-i tobčilan quriyaγsan altan tobči kemekü orusibai. ulaγanbaγatur, ulus-un keblel-ün γaǰar.

Cleaves, Francis W., ed.　1952.

Altan Tobči: A Brief History of the Mongols by bLo bzan bsTan 'jin. Cambridge, Harvard University Press,

Hung, William　1951

The Transmission of the Book Known as *the Secret History of the Mongols*, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 14. Cambridge, Harvard-Yenching Institute.

Ligeti, Louis　1971

Histoire secrète des Mongols. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta I.), Budapest, Akadémiai Kiadó.

——　1972

Pièces de chancellerie en transcription chinoises (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta III), Budapest, Akadémiai Kiadó.

——　1974.

Histoire secrète des Mongols: Texte en ecriture ouigoure incorpore dans la chronique Altan Tobci de Blo-bzan bstan-jin. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta VI), Budapest, Akadémiai Kiadó.

Юань-чао би-ши(Секретная история монголов) 15 цзюаней　1962,

Издание текста и предисловие Б.И.Панкратова. Институт народов Азии, Москва. テキストの部分は『元朝秘史三種』(1975:623-771) に再録。

石田幹之助　1931

「女真語研究の新資料」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』1931 年、1271-1323 頁、京都、弘文堂。石田 (1973 : 3-69) に再録。

石田幹之助 1973

『東亜文化史叢考』東京、東洋文庫。

小澤重男　1961

「中世蒙古語の動詞語尾の体系」『言語研究』第 40 号、 33-80 頁、日本言語学会。小澤 (1979:30-77) に再録。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

小澤重男　1979

『中世蒙古語諸形態の研究』東京、開明書院。

小澤重男　1994

『元朝秘史』岩波新書346、東京、岩波書店。

栗林均・确精扎布　2001

『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』仙台、東北大学東北アジア研究センター。

栗林均　2002

「『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について」『言語研究』第121号、1-18頁、日本言語学会。

栗林均　2003

『「華夷訳語」モンゴル語全単語・語尾索引』仙台、東北大学東北アジア研究センター。

陳垣　1934

『元秘史譯音用字攷』北平、国立中央研究院歷史語言研究所。

服部四郎　1946

『元朝祕史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京、文求堂。

额尔登泰、乌云达赉、阿萨拉图　1980

『《蒙古秘史》词汇选释』呼和浩特、内蒙古人民出版社

『元朝秘史三種』京都、中文出版社、1975.

NII-Electronic Library Service